



町の子供は町で育てる

「3つの合言葉」元気・学び・会話

## 滑川町教育委員会だより

「学んでよかった町へ -チーム滑川での教育-」

## 教養とは人の心がわかる心である

6月17日の読売新聞の朝刊で、ノートルダム大学教授のパトリック・J・デニーン氏来日講演の記事を読みました。「自由を絶対視 秩序失った米国」という見出しでしたが、自由の絶対視が、格差の拡大や秩序の破壊をもたらしたという内容でした。デニーン氏は、著書『リベラリズムはなぜ失敗したのか』で、近代リベラリズムが追求した「自由」の理念が、個人を伝統的な社会や組織から解放する一方で、現代の危機（格差拡大、秩序の破壊）をもたらしたとして、大きな反響を呼んだ米国保守界の重要論客です。デニーン氏は講演の中で日本の小学校で給食の配膳を見たエピソードを語りました。「米国にはかつて住民が協力して地域の問題に取り組みながら、他者への配慮や自律を習得するコミュニティがあった。フランスの政治思想家のアレクシ・ド・トクヴィル（1805 - 1859）は、このコミュニティを『民主主義の小学校』と評した。日本の小学校の給食の配膳も、義務や奉仕などを自然に学ぶ場である」と説明しています。

この記事を読んで、山崎エマさんの『それでも息子を日本の小学校に通わせたい』という本を思い出しました。山崎さんは「小学校～それは小さな社会～」という長編ドキュメンタリー映画の監督を務めた方です。この映画のキャッチコピーは「6歳児は世界のどこでも同じようだけど、12歳になる頃には、日本の子供は日本人になっている」というものです。日本の小学校では学習活動だけでなく、思いやりや協力、責任感など人として大切なものが日々の生活を通して育まれています。山崎さんは、それが日本の小学校の良さであり強みであるとしています。

先日、登校指導でつきのわ駅の南側まで歩いていったときのことで。泣いている一年生児童に寄り添いやさしく励ましている六年生児童の姿を見ることができました。しばらくすると一年生児童は、機嫌を直し元気に歩き出しました。通学ボランティアの方と「日本もまだまだ捨てたものではないですね」と言葉を交わし、心が温かくなりました。誰かに教えられたからではなく、ごく自然に下級生を気遣う姿に人としての豊かさを見る思いがしました。この時、二人の小学生にどのような心の働きがあったのでしょうか。

発達心理学に「心の理論」と呼ばれるものがあります。発達心理学では「心を読む」と表現しますが、「相手の立場で考える」ということです。もっと簡単にいえば心を「交換する」能力のことです。他人の立場に立っているかを確認する「サリーとアン課題」というものがあります。

- ①サリーとアンが部屋にいます。
- ②サリーはボールをかごに隠します。
- ③サリーが部屋を出ていき、アンはボールを箱に戻します。
- ④サリーが部屋に戻ってきたとき、サリーはどこを探しますか？という課題です。

必ずしも心を読む必要はなく、「サリーの立場だったら」と心を交換することができれば、この課題はクリアです。

六年生児童は、一年生児童と心を交換することができたのでしょうか。また、一年生児童も六年生児童の立場に立つことができたので機嫌を直したのだと思います。

このような視点で考えてみると、日本の学校では子供たちは、全ての教育活動を通して「相手の立場に立つ」「心を交換する」「親身になる」「他人の靴を履いてみる」などの経験をしていることがわかります。そのことが、山崎エマさんが指摘する日本の小学校の良さ、強みにつながっているのだと思います。

私たちは、どうしても自分を中心に物事を考えがちです。しかしその一方で、困っている人を見れば助けたいと思い、悲しむ人を見れば心を痛めます。相手の立場に身を置き、その気持ちに寄り添う力、すなわち「共感する力」が、人間には備わっているのだと思います。

哲学者イマヌエル・カント（1724-1804）は、「幸福を追求することは自己の権利であり、他者の幸福を追求することは自己の義務である」と述べています。また、東洋のある高名な宗教指導者は「倫理とは何か」と問われ、「Warm Heartedness（温かな心）」と答えました。温かな心こそが、人間の美しさであり、社会を支える基盤なのでしょう。

解剖学者の養老孟司さんの恩師、中井準之介（1918-2004）さんは、「教養とは人の心がわかる心だ」という言葉を遺しています。「もし自分が相手の立場だったら」と想像し、他者の喜びや悲しみに共感できること。そのような心の働きこそが、人間を人間たらしめるものなのだと思います。

他者と共感、共振、共鳴し、ともに生きていこうとする心を育てること。それこそが教育の根幹であり私たち大人に課せられた大切な使命であると、子どもたちの姿から教えられる毎日です。



## 図書館からのおすすめ絵本



図書館オリジナルキャラクター  
ブックろう

図書館では、家族と一緒に本を読むことで、読書に親しんでもらうとともに、家庭内のコミュニケーションを深めることを目的とした「家読」(家庭読書)を推進しています。こどもも大人も楽しめる、家読にぴったりの絵本をご紹介します♪



『なつやすみ』  
麻生 知子 作  
福音館書店

## 『なつやすみ』

こんな人におすすめ

夏へのワクワクが止まらない方へ

ギラギラ照り付ける太陽、もくもく広がる入道雲、ひんやり甘いスイカに、提灯が揺らめくお祭りの夜。夏は楽しいことがいっぱい、何だか特別で嬉しくて仕方ない…。そんな誰もがワクワクする夏の様子を、ちょっと不思議な角度から描いた一冊です。

ページをめくると、見慣れたはずの「なつやすみ」の様々な風景が、特別な時間として感じられます。大人にとっては幼い頃の記憶が優しくよみがえるような、こどもも大人も一緒になって夏を愛しく思える、どこか懐かしくて暖かい作品です。

同シリーズ『りょこう』『こたつ』も、ぜひご覧ください♪

※この本は、滑川町立図書館に所蔵があります(貸出中のときは予約ができます)

文化財シリーズ!  
第16回

## 「滑川町の歴史」 part 16

よこあなほぐん

### 古墳時代の滑川町～群をなすお墓ー横穴墓群～



エコミュージアムセンター  
オリジナルキャラクター

古墳時代後期になると、群衆墳と呼ばれる小規模な円墳を主体とした群としての古墳が各地で築かれます。群衆墳は、横穴式石室が採用されることが多く、追葬と言って、後から被葬者の家族などを同じ古墳に埋葬でき、同族的なつながりを持って埋葬される家族墓としての古墳が増えて来ています。中でも、特徴的なのが、古墳のような墳丘を持たない横穴墓群と呼ばれるお墓で、より家族墓としての意味合いが強い墓制です。近隣では、吉見百穴が特に有名ですが、比企地域では、凝灰岩質で横穴を掘りやすい比企丘陵の側面を利用して造られた横穴墓群が見られ、吉見百穴の他にも黒岩横穴墓群(吉見町)や比丘尼山横穴墓群(東松山市)、十郎横穴墓群(鳩山町)などがあります。



天神山横穴墓群

滑川町では、埼玉県指定史跡となっている天神山横穴墓群があります。かつては5基が開口していたとされますが、そのうち4基が埋められ現在開講しているのは1基のみとなっています。この開口している1基は、幅・長さともに2.44mで、左側壁に接して棺台が設けられています。天井部はアーチ状をし、羨道部の中心に排水溝が掘られています。指定を受ける前には、地下電気探査が行われ、開口している1基のほか、24基ほどの横穴墓の存在が推定されています。



横穴墓内部(右側が棺台)

★町内の古墳出土の副葬品(埴輪)の一部を、エコミュージアムセンターにて常設展示しています!

○7月の休館日:毎週月曜日、祝日及び7/19～21は、休館のため休展です。